

巻頭言

歴史分科会長 鎌倉学園高校 神田 基成

本年度より、神奈川県社会科部会歴史分科会の分科会長を務めることになりました鎌倉学園中学校・高等学校の神田基成と申します。まずは、日頃より本分科会の活動を支えてくださっている会員の皆様、ならびに関係各位に、心より御礼申し上げます。15年ほど部会の活動に携わってきましたが、分科会長としては初年度となり、至らぬ点多々ありましたが、役員・委員の先生方、そして各研究会・例会に参加して下さった多くの会員・参加者の皆様の支えにより、本年度の活動をまとめることができました。本冊子『研究報告』は、そうした一年間の実践と議論の成果を記録したものであり、本分科会の現在地を示すものでもあります。

今年度を振り返ると、国内外の社会情勢は依然として大きな変化の途上にあると思われた一年でした。国際社会の不安定化、生成AIの普及など情報環境の急速な変化、価値観の多様化と分断の進行などは、私たち大人以上に生徒たちの世界認識や歴史の捉え方にも大きな影響を与えているのではないのでしょうか。学校現場においても、学習指導要領のもとで「主体的・対話的で深い学び」が求められる一方、授業時数や校務負担など、現実的な制約の中で授業改善を進めていく難しさを実感しています。こうした状況の中で、歴史教育には、過去の事実を学ぶことにとどまらず、現在の社会を相対化し、未来を構想する視点を育てる役割が一層求められています。とりわけ「歴史総合」の実施以降、通史的理解と主題的・探究的学習をどのように結びつけるのか、「何を教えるのか」だけでなく「なぜ教えるのか」「どのように学ばせるのか」という問いが、私たち教員自身に突き付けられています。

本冊子に収められた実践報告や研究成果は、そうした問いに向き合いながら、生徒の学びをより良いものにしようと試行錯誤を重ねてきた現場から作り上げられた努力の結晶、言い換えれば「宝石」とも呼ぶべきものです。必ずしも完成形ではない「原石」もあるかもしれませんが、読者それぞれが自身の授業を振り返り、新たな実践へと踏み出し「宝石」に仕立て上げていく手がかかりとなることを期待しています。研究と授業を往還し、「明日の授業に生きる知」を共有することこそ、本分科会の大きな意義であると考えています。

社会が大きく揺れ動く時代だからこそ、歴史を学ぶ意味はますます重要になっています。この巻頭言を書いている最中に、アメリカやイスラエルによるイランへの攻撃のニュースが入ってきました。混迷の度合いをさらに深めてしまいそうな事態が次々と起こってしまう今だからこそ、歴史に学ぶことの意義、議論を積み重ねていくことの意味をあらためて大切にしたいと感じました。

本分科会が、会員相互の学び合いと支え合いの場として、今後も歴史教育の充実に寄与していくことを願い、巻頭の言葉といたします。